二俣町の人口と世帯

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2022-04-21 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 西本, 陽一 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24517/00065931

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.

2. 二俣町の人口と世帯

西本 陽一

1. はじめに
2. 人口
3. 世帯
4. おわりに

1. はじめに

本章では、主に 2015 年国勢調査データによりながら、二俣町の人口と世帯構成について記述・分析してゆく。日本全体の人口と世帯構成と二俣町のそれとの比較を通して、二俣町の人々が経験してきた生活の変化と現在の状況が浮かびあがるであろう。

2. 人口

日本全体を見ると、戦後は食糧増産が振興された他に、第二次産業を中心として経済復興・経済成長の道をたどってきたが、1990 年代のバブル崩壊以降は、長い不況の中にある。人口は、高度経済成長期（1955～73 年）を経て急速に増えてきた。一方で 1974（昭和 49）年以降、合計特殊出生率は人口を同じ水準に保つのに必要な水準である 2.1 を下回り、少子化が進んでいった（矢野恒太記念会編 2020: 12）。その結果、5 年ごとに実施される国勢調査による日本の人口は、2015（平成 27）年より減少に転じている。

年少人口（0～14 歳）、生産年齢人口（15～64 歳）、老年人口（65 歳以上）という年齢層別の人口割合を見ると、どれくらいの生産年齢人口の人々が、それ以外の人々を支えているかが分かる。日本全体の生産年齢人口の割合は、1990（平成 2）年をピークとして、以来減少傾向となり 2020（令和 2）年には 60%を切って 59.5%となった。これと平行して、年少人口の割合は 1960（昭和 35）年の 30.2%以来減少傾向にあり、2020（令和 2）年には 11.9%となった。その一方で、老年人口の割合は一貫して増え続け、2020（令和 2）年には 28.6%にまで達している。少子高齢化の中で、生産年齢人口の人々が年少人口と老年人口の人々を支える負担はますます重くなっている [1]。

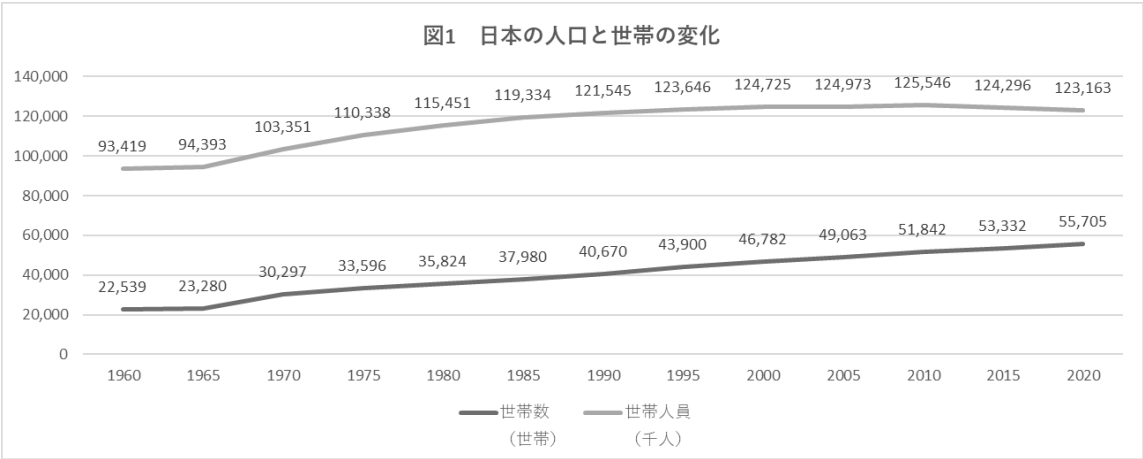
1960（昭和 35）年以来、日本全体の世帯数は 2020 年まで増加を続けてきた。しかし、一世帯あたりの人員（表中の「世帯人数」）は、1960（昭和 35）年の 4.14 人から漸次的に減少し、2020（令和 2）年には 2.21 人となった。これは、高度経済成長期以降に、地方から都市部へ移動し、都市部で家族をもった人が増えたために、都市部を中心とした核家族化が進行したためだと考えられる。同時に、近年は一人暮らし世帯が増えている（矢野恒太記念会編 2020: 13）。

[1] 矢野恒太記念会編（2020）、『令和 2 年国勢調査人口等基本集計結果の要約』を参照。

表1　日本の人口と世帯の変化

和暦（年）	西暦（年）	世帯数（世帯）	世帯人員（千人）	世帯人数（人）	総人口（千人）	男人口（千人）	女人口（千人）	男／女（%）
昭和35	1960	22,539	93,419	4.14	94,302	46,300	48,001	96.46
昭和40	1965	23,280	94,393	4.05	99,209	48,692	50,517	96.39
昭和45	1970	30,297	103,351	3.41	104,665	51,369	53,296	96.38
昭和50	1975	33,596	110,338	3.28	111,940	55,091	56,849	96.91
昭和55	1980	35,824	115,451	3.22	117,060	57,594	59,467	96.85
昭和60	1985	37,980	119,334	3.14	121,049	59,497	61,552	96.66
平成2	1990	40,670	121,545	2.99	123,611	60,697	62,914	96.48
平成7	1995	43,900	123,646	2.82	125,570	61,574	63,996	96.22
平成12	2000	46,782	124,725	2.67	126,926	62,111	64,815	95.83
平成17	2005	49,063	124,973	2.55	127,768	62,349	65,419	95.31
平成22	2010	51,842	125,546	2.42	128,057	62,328	65,730	94.82
平成27	2015	53,332	124,296	2.33	127,095	61,842	65,253	94.77
令和2	2020	55,705	123,163	2.21	126,146	61,350	64,797	94.68

世帯については「一般世帯」の数（世帯数、世帯人員）を示している。
各年の国勢調査データを総務省統計局ウェブサイトのe-Statより閲覧し、筆者が作成した。



次に、二俣町の人口と世帯の変化を見てゆきたい。二俣町では 19 から 20 世紀へ変わる 10 年ほどに、多くの世帯が北海道や大都市圏へ転出している。この頃は、藩政期に二俣町の主要産業だった紙すき業が衰退していた時期で、それが人口減少の原因であった（鹿野　1993: 3-4）。

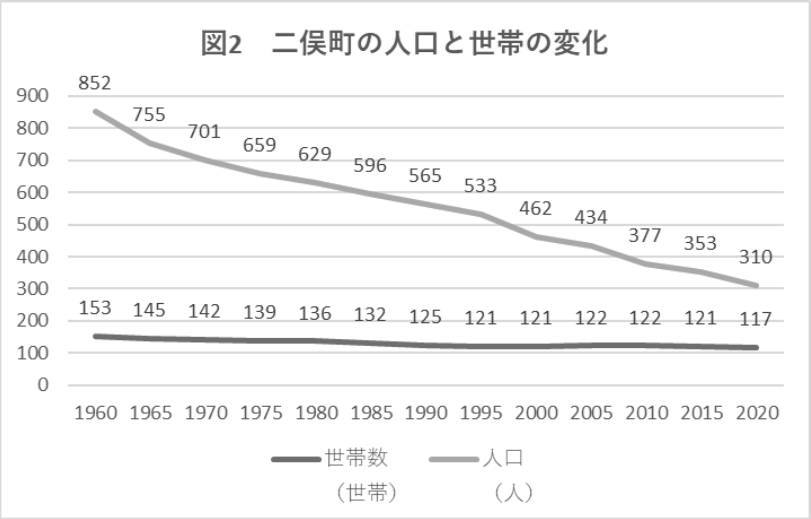
戦後の国勢調査データを見ると、1960（昭和 35）年から 2020（令和 2）年まで二俣町は、人口と世帯数ともに減少している。しかし、この間に人口は常に減少し、その減少率も高いのに比して、世帯数については常に減少してきたわけでなく、減少率も小さい。具体的には、1960（昭和 35）年から 2020（令和 2）年のあいだに人口は 755 から 310 人へと大きく減少した一方で、世帯数は 145 から 117 世帯への減少にとどま

っている。これに呼応して一世帯あたりの人員（表の「世帯人数」）は、5.21 人から 2.65 人へと減っている。

表2　二俣町の人口と世帯の変化

和暦（年）	西暦（年）	世帯数（世帯）	人口（人）	世帯人数（人）	男人口（人）	女人口（人）	男／女（%）
昭和35	1960	153	852	5.57	–	–	–
昭和40	1965	145	755	5.21	366	389	94.09
昭和45	1970	142	701	4.94	330	371	88.95
昭和50	1975	139	659	4.74	325	334	97.31
昭和55	1980	136	629	4.63	305	324	94.14
昭和60	1985	132	596	4.52	295	301	98.01
平成2	1990	125	565	4.52	281	284	98.94
平成7	1995	121	533	4.40	264	269	98.14
平成12	2000	121	462	3.82	223	239	93.31
平成17	2005	122	434	3.56	212	222	95.50
平成22	2010	122	377	3.09	176	201	87.56
平成27	2015	121	353	2.92	171	182	93.96
令和2	2020	117	310	2.65	152	158	96.20

1889年年は二俣、奥新保、砂子坂が対象。2020年については二俣町、砂子坂町、荒山町、奥新保町が対象。1889年、1925年、1960年については鹿野（1993: 3）を、その他は各年の『市町村地区別人口及び世帯の概況』および e-Stat をもとに筆者作成。



日本全体と二俣町を比較して見ると、1960（昭和 35）年から 2020（令和 2）年までのあいだに、日本全体では（最近の人口減少傾向を除いて）人口・世帯数ともに増加を続けてきた。一方で、二俣町の人口と世帯数はつねに減少傾向にあったが、細かく見ると、

二俣町では、人口の減少度に比して、世帯数の減少度は小さく、1990 年以降はほぼ横ばいと言ってもよいくらいである。

日本全体については、高度経済成長期（1955～73 年）以来、地方から多くの人々が進学や就労のために都市部に移動し、一定期間を経ても地方に戻らず、都市部で家族をもち定住する傾向があったことは先述のとおりである。また二俣町では、多くの若者がますます県外へ進学・就職するようになり [2]、また金沢でも市街地に近い場所に移動する世帯が見られたことは、二俣の住民の方々への聞きとりのなかでしばしば聞かれたことであった（O さん、男性、73 歳など）。昭和 40 年代には二俣町に自家用車が普及していったが（K さん、男性、64 歳）、2013（平成 15）年に金沢井波線（県道 27 号線）の改良事業が完了するまでは、自動車による金沢などへの通勤も不便で、時に危険でさえあった（Y さん、男性、67 歳など）。そう考えてくると、一世帯あたりの人員（「世帯人数」）については、日本全体と二俣町は同様の変化（漸次的な減少）を示しているが、原因は異なると推測される。日本全体の世帯人数の減少が、都市部を中心とした核家族

表3　日本の男女別年齢構成

	計		男		女	
	（千人）	（%）	（千人）	（%）	（千人）	（%）
85歳以上	4,887	3.9	1,462	1.2	3,426	2.7
80～84歳	4,961	3.9	1,994	1.6	2,967	2.4
75～79歳	6,277	5.0	2,787	2.2	3,489	2.8
70～74歳	7,696	6.1	3,582	2.9	4,113	3.3
65～69歳	9,644	7.7	4,660	3.7	4,984	4.0
60～64歳	8,455	6.7	4,151	3.3	4,304	3.4
50～54歳	7,930	6.3	3,968	3.2	3,962	3.2
55～59歳	7,515	6.0	3,730	3.0	3,786	3.0
45～49歳	8,663	6.9	4,355	3.5	4,308	3.4
40～44歳	9,732	7.7	4,914	3.9	4,818	3.8
35～39歳	8,316	6.6	4,204	3.3	4,112	3.3
30～34歳	7,291	5.8	3,685	2.9	3,606	2.9
25～29歳	6,410	5.1	3,256	2.6	3,154	2.5
20～24歳	5,968	4.8	3,046	2.4	2,922	2.3
15～19歳	6,008	4.8	3,085	2.5	2,923	2.3
10～14歳	5,599	4.5	2,868	2.3	2,731	2.2
5～9歳	5,300	4.2	2,715	2.2	2,585	2.1
0～4歳	4,988	4.0	2,551	2.0	2,437	1.9
総数	125,641	100.0	61,013	48.6	64,628	51.4

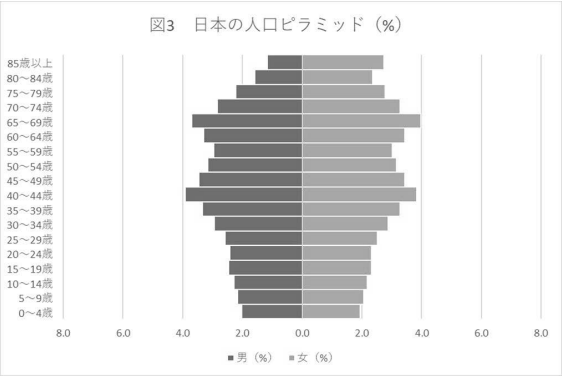
（総数は「不詳」を除く。2015年国勢調査データより筆者作成）

表4　二俣町の男女別年齢構成

	計		男		女	
	（人）	（%）	（人）	（%）	（人）	（%）
100歳以上	0	0.0	0	0.0	0	0.0
95～99歳	2	0.6	1	0.3	1	0.3
90～94歳	7	1.9	1	0.3	6	1.7
85～89歳	17	4.7	5	1.4	12	3.3
80～84歳	32	8.9	13	3.6	19	5.3
75～79歳	20	5.5	9	2.5	11	3.0
70～74歳	21	5.8	13	3.6	8	2.2
65～69歳	43	11.9	22	6.1	21	5.8
60～64歳	28	7.8	13	3.6	15	4.2
55～59歳	32	8.9	15	4.2	17	4.7
50～54歳	22	6.1	9	2.5	13	3.6
45～49歳	16	4.4	9	2.5	7	1.9
40～44歳	19	5.3	10	2.8	9	2.5
35～39歳	13	3.6	7	1.9	6	1.7
30～34歳	15	4.2	6	1.7	9	2.5
25～29歳	10	2.8	6	1.7	4	1.1
15～19歳	17	4.7	8	2.2	9	2.5
20～24歳	18	5.0	8	2.2	10	2.8
10～14歳	15	4.2	10	2.8	5	1.4
5～9歳	8	2.2	3	0.8	5	1.4
0～4歳	6	1.7	6	1.7	0	0.0
計	361	100.0	174	48.2	187	51.8

（2015年国勢調査データより筆者作成）

[2] 現在、二俣町で暮らす高齢者の方の中には、子供たちが都市部の大学に進学し、卒業後も都市部に定住しているという方もいらした（S さん、男性、93 歳；T さん、男性、73 歳ほか）。



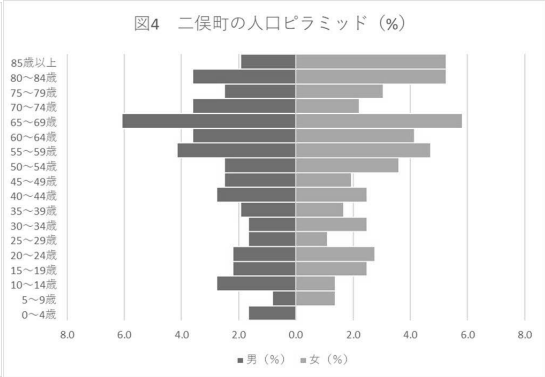


表5　日本の人口構成

	男（千人、%）		女（千人、%）		計（千人、%）	
0～14歳	8,134	13.3	7,753	12.0	15,887	12.6
15～64歳	38,394	62.9	37,894	58.6	76,289	60.7
65歳～	14,485	23.7	18,980	29.4	33,465	26.6
計	61,013	100.0	64,628	100.0	125,641	100.0

（2015年国勢調査データより筆者作成）

表6　二俣町の人口構成

	男（人、%）		女（人、%）		計（人、%）	
0～14歳	19	5.3	10	2.8	29	8.0
15～64歳	91	25.2	99	27.4	190	52.6
65歳～	64	17.7	78	21.6	142	39.3
計	174	48.2	187	51.8	361	100.0

（2015年国勢調査データより筆者作成）

化によるものである一方で、二俣町のそれは若者世代や壮年世代の人々が就学や就労のために外へ出て行ったためだと推測される。

次に、日本全体および二俣町の人口について、2015（平成 27）年の男女別年齢構成を見てゆく。日本全体の高齢化率（65 歳以上の高齢者が総人口に占める割合）は 26.6%である一方、二俣町のそれは 39.3%である [3]。超高齢化社会日本のなかでも、二俣町の高齢化は際立っている。

人口の男女別年齢構成を図示した人口ピラミッドを見ると、日本全体と二俣町の人口構成の違いがよりはっきり見て取れる。少子高齢化が進んでいるとは言え、日本全体の人口ピラミッドは、中層部が広がった壺のような形をしている。一方で二俣町のそれは、54 歳以下の部分がしぼられて小さくなったような形で、それが大きく広がった上部（55 歳以上の部分）を支えている。日本全体に比べて、二俣町の人口構成は不安定で脆弱性

[3] 2020 年の二俣町の高齢化率は不明であるが、2020 年の日本全体の高齢化率は 28.6%で、高齢化がさらに進展している。

が高いことが分かる。

3. 世帯

表 7 は、2015 年国勢調査データをもとに、二俣町と日本全国の世帯類型を比較したものである。表 7 は、全世帯をまず「親族のみの世帯」、「非親族を含む世帯」、「単独世帯」に分けている。「親族のみの世帯」については、「核家族世帯」と「核家族以外の世帯」に分けられ、「核家族世帯」には、「夫婦のみの世帯」と「親と子供から成る世帯」が含まれている。「夫婦のみの世帯」には、高齢者の夫婦のみの世帯も含まれているが、これについては表 8 と併せて考察することが出来る。また「3 世代世帯」が、別に示されている。表 7 では「非親族を含む世帯」と「その他（未詳を含む）」が別に掲載されているが、図 5 と図 6 ではこれらを合わせて「その他」として示している。

表 7 から、二俣町の「親族のみの世帯」が全世帯に占める割合は 81.0%であり、全国のそれ（64.3%）を上回ることが分かる。これは二俣町の「単独世帯」の割合（19.0%）が全国のそれ（34.5%）を下回ることによるものである。

表 8 と合わせて見ると、「単独世帯」の詳細がある程度分かる。日本全国における「単

表7　二俣町と全国の世帯類型

世帯の家族類型	二俣町		日本全国	
	（世帯）	（%）	（千世帯）	（%）
総数	126	100.0	53,332	100.0
親族のみの世帯	102	81.0	34,315	64.3
核家族世帯	65	51.6	29,754	55.8
うち夫婦のみの世帯	31	24.6	10,718	20.1
うち両親と子供から成る世帯	23	18.3	14,288	26.8
核家族以外の世帯	37	29.4	4,561	8.6
非親族を含む世帯	0	0.0	464	0.9
単独世帯	24	19.0	18,418	34.5
その他（未詳を含む）	0	0.0	135	0.3
（再掲）3世代世帯	22	17.5	3,023	5.7

（2015年国勢調査データより筆者作成）

図5　日本の世帯類型

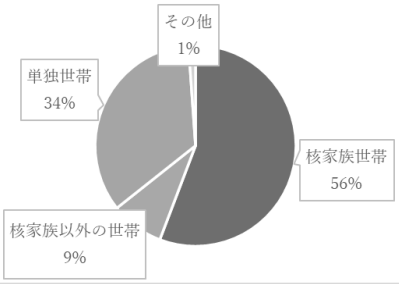
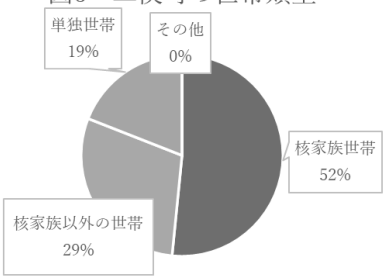


図6　二俣町の世帯類型



独世帯」18,418 千世帯、34.5%のうち、高齢者の単独世帯は 5,928 千世帯、11.1%であり、単独世帯の約 3 分の 2 は非高齢者の一人暮らしである。そこには独身の若者の一人暮らしが多く含まれると思われる。一方で、二俣町の単独世帯 24 世帯、19.0%のうち、高齢者の単独世帯は 22 世帯 17.5%であり、単独世帯のほとんどが高齢者の一人暮らし世帯であることが分かる。

日本全体の数字は不明だが、二俣町において高齢者のみからなる世帯は、47 世帯、37.3%と高い率を示している（表 8)。高齢者のみからなる世帯は、別居親族、町会、近隣住民などによるケアが必要な場合が多いと考えられ、特に災害や非常時の際の脆弱さが懸念される。

高齢者を含む世帯については、日本全体が 21,713 千世帯、40.7%であるのに対して、二俣町のそれは 95 世帯、75.4%と日本全体を大きく上回っている（表 8)。

表8　高齢者を含む世帯の状況

	二俣町				日本全体	
	65歳以上世帯員のいる世帯		65歳以上世帯員のみの世帯		65歳以上世帯員のいる世帯	
	（世帯）	（%）	（世帯）	（%）	（千世帯）	（%）
総数（世帯の家族類型）	95	75.4	47	37.3	21,713	40.7
親族のみの世帯	73	57.9	25	19.8	15,655	29.4
核家族世帯	38	30.2	23	18.3	11,740	22.0
うち夫婦のみの世帯	27	21.4	22	17.5	6,420	12.0
うち両親と子供から成る世帯	4	3.2	0	0.0	2,998	5.6
核家族以外の世帯	35	27.8	2	1.6	3,914	7.3
非親族を含む世帯	-	-	-	-	131	0.2
単独世帯	22	17.5	22	17.5	5,928	11.1
その他（未詳を含む）	-	-	-	-	-	-
（再掲）3世代世帯	21	16.7	0	0.0	2,701	5.1

（2015年国勢調査データから筆者作成）

4. おわりに

以上、2015 年国勢調査データを中心に、日本全国と二俣町の人口と世帯構成の変化について見てきた。戦後の日本は、経済復興・経済成長の中で、人口・世帯数ともに増加してきたが、合計特殊出生率は次第に低下し、少子化と高齢化が進行してきた。1990 年代のバブル経済崩壊後、現在まで長い不況に見舞われている。

1960（昭和 35）年以来、二俣町の人口は減り続けてきた一方で、世帯数の減少度は小さい。これは、高度経済成長期（1955～73 年）から、二俣町の若者や壮年層の人々が多く、都市部など外に移住した結果だと考えられる。就学のために県外へ移住して、卒業後も二俣町に帰らない若者も多いという。若者や壮年の人々が外に出ていったことが、出生率の低下と相まって、二俣町の人口から若い層が大きく抜けてしまったと考えられる。人口と世帯の高齢化が、二俣町が直面している課題である。

このような少子高齢化の進展は、本研究室が実習を実施してきた石川県の地域集落に

は共通して見られることである。しかし、二俣町が他のそれらの集落と異なるのは、近年に道路交通が格段に発達し、住民の方々の生活圏が広がったことであろう。29 年前の本研究室による実習時に二俣町は、交通も不便な「三方を山に囲まれた狭隘な谷底に立地する山村」（鹿野　1993: 1）であったが、今では「もう金沢とつながってる」（K さん、男性、77 歳）と言ってよい。「若いもんは外に出たら帰ってこん」（O さん、男性、73 歳）などの言葉は、交通の発達が、二俣町の少子高齢化に対して、今のところ解決になっていないことを示している。それでも、交通の発達によって金沢市街への通勤・通学がたやすくなったことの効果は、今後、二俣町の直面する人口問題の緩和として現れてくるかもしれない。